

ろくべん館だより Vol.45

『歳時記をよむ』

八月二十三日、出がけにふと見た暦に「処暑」とあった。今まで気にしたこともなかったが、「処暑」とはどういう意味だろう。

出先で会った俳句を詠む友人に、「処暑ってどういう意味なの？」ときいてみた。「暑さもここでひと息つくという意味だと思う」と言いながら、自分の歳時記を引っぱり出してきてくれた。

「立秋」から十五日経つ頃には、暑気も止息する意と書かれている。「立秋」も「処暑」も二十四節気のひとつである。ここに暮らしていると、この節気が実にしっかりと体感できる。処暑を過ぎると、秋はこれから「白露」「秋分」「寒露」「霜降」と深まってゆく。季節の移ろいを表現する日本語のなんと豊富で美しいことか。

わが家に逗留する外国の都会で育った若者が、季節が変わるといろんなことが違ってくると驚いていた。花も虫も鳥も空も山も、みな変化する。「それじゃあ、季節毎に新しい発見があるね」と応じると、「毎日、発見です」と言っていた。わたしたちには特に目新しく感じられなくなっていることも、都会育ちの若者にとってはさぞ新鮮に感じられることだろう。あらためて日本は四季の変化がそれぞれ情趣に富むことを認識させられる。ましてや、わたしたちの住むような山村ともなれば、季節は色や匂いを伴って五感に深く沁みとおってくる。

歳時記をめくってみると、今日ではあまり使われなくなっている言葉もたくさんあるし、知らない言葉も出てくる。秋の季語に「別鴉（わかれがらす）」というのを見つけて、なんのことだろうと読んでみると、カラスは親子の愛情がひじょうに深く、孵化して六十日ほど母鳥に育てられるが、重陽（九月九日）ともなると、カラスの親子がひとつの栗のいがを分け合って食べ別れるという言い伝えがあるのだそうだ。「カラス」というと街の嫌われ者というイメージを現代人は抱きがちだが、カラスは頭の良い鳥といわれているだけに、その情愛の深さを昔の人は柔らかいまなざしで見っていたのだろう。それ以外にも「鴉の巣」は春、「鴉の子」は夏、「寒鴉」は冬、「初鴉」は新年と、カラスは歳時記に一年中顔を出す常連である。時代とともに、人が事象に対して持つ印象は変わるものだと知った。

同じように、「鰻魚を祭る（かわうそうおをまつる）」「蚯蚓鳴く（みみずなく）」もなにやらおもしろそうな季語である。カワウソは獲った魚をすぐには食べず、岸にならべておく習性があるという。それを見て、カワウソは陰暦の正月に魚を供えて先祖を祀るのだと空想した話による季語らしい。そして、ミミズはなんと鳴くのか？秋の夜「ジーッ」と切れ目なく鳴く声を、古くからあれはミミズが鳴くのだといったらしい。実際はケラの声なのだそうだが。「へー」と思う逸話が多いのも、歳時記のおもしろいところである。

山に住んでいる者にとって「山笑う」(春)、「山滴る」(夏)、「山装う」(秋)、「山眠る」(冬)などは、その表現の妙に頷かずにいられない。風土や気象に関する言葉は特に多彩で、「雨」や「風」の呼び名の多さでもよくわかる。

一方、歳時記にある季節の食べ物を見ていると、わたしたちは「旬」という感覚をかなり鈍化させていることに気づかされる。ハウス栽培される野菜、冷凍保存される魚は季節を告げるものではない。それに暖房や冷房で温度設定された家に住むのは快適かもしれないが、暑さ寒さ暖かさ涼しさを繊細に表現する言葉からも、現代人の暮らしは遠ざかっているように思える。快適さを求めすぎると、暑さも寒さもやっかいものになりかねない。今では「団扇」や「打ち水」、「火鉢」や「焚火」は死語になりつつあるのだろうか。

最近、仕事の行き帰りの道で、小さなリスを何度か見かけている。落ちた木の実でも拾っているのだろうか。リスに限らず、路上で動物をよく見かける場所は、山中であっても限られている。斜面を切り崩して造られた道は、山側に石垣が積まれていたり、コンクリートが吹きつけられている。道まで土のままの斜面が続いている箇所は、そんなに多くはないのである。人による建造物でケモノの道は遮断されてしまう。近々、拡幅工事が数か所で予定されているわが通勤路だが、あのかわいらしいリスの姿を見かける機会も少なくなってしまうのだろうか。じわじわとこんなふうに季節感も自然も少しずつ失われていくのかもしれないと危惧している。

「暑い、暑い」といって嘆いた夏も、あっという間に過ぎてしまった。去っていく季節を惜しみながらも、風に揺れるススキの穂に、冴えざえとしてくる夜空の月に胸がおどる。九月に入れば、そろそろ鹿のもの哀しいピーという声が聞こえてきそうである。そこかしこに季節を感じられる山家の暮らしは、なんとしあわせなことか。古来からの日本の季節を表現する言葉は、そもそも豊かな自然があつてこそ培われてきたものだ。季節によって様々な変化を見せてくれる自然も、それを感じ取る人の感性も、どちらも失いたくないものである。